

【氏名】 松本 明日香

【所属】(助成決定時)

筑波大学大学院 現代文化・公共政策専攻 グローバルガバナンス分野

【研究題目】

米国大統領候補者討論におけるレトリック戦略

【研究の目的】

1960年および1976年以降すべてのアメリカ大統領選挙で、大統領候補者間のテレビ・ディベートが行われてきている。1976年討論においては、「ディベート上での失言によってフォード大統領は敗退した」と評価されている。しかし、1976年ディベートの研究には学術的問題と社会的問題がある。学術的には、ミクロな人文学的・社会学的研究の統括によるマクロな政治学理論への貢献する必要がある。修士論文で構築した言語、非言語的ミクロな分析と当時の史料をリンクさせる多重的な研究が1976年度研究においても必要であろう。1960年ディベートと対照させることにより、時代ごとの政治レトリックの変容と一貫性が検証できる。また、社会的には、政治ディベート評価に新たな視点を提示することが必要である。選挙候補者や政治家のスピーチの形成過程を追うことで、私たちの政治への認識はより良く変わるだろう。

【研究の内容・方法】

研究方法は政治史料、スピーチスクリプト、スピーチ映像の分析が主である。1976年ディベートの文字スクリプト、映像資料、レトリック作成史料を大統領図書館から入手して、レトリック分析、映像分析、レトリック形成過程分析を行った。1976年ディベート調査のためにミシガン州にあるフォード大統領図書館、ジョージア州にあるカーター大統領図書館等に赴き、ディベート準備資料を収集した。当時の新聞、雑誌、過去の大統領時代、議員時代のスピーチ、当時の歴史的背景を吟味しながら、1976年ディベートにおけるレトリックの政治的機能を明らかにした。

1960年ディベートと対照させることを視野にいれ、1976年ディベートにおけるレトリックの特徴を明示した。1960年ディベートと1976年ディベートはそれぞれ、現職と挑戦者が合意して、ディベート史を切り開いたという共通点があり、対照する事例として適している。1960年には現職副大統領ニクソンと挑戦者ケネディが合意して初めてのテレビ・ディベートが、1976年には現職大統領フォードと挑戦者カーターが合意して長らく休止時期を経た後ディベートが実施された。

1960年討論に関しては、テレビ・ディベートという1つのメディアイベントを通して、市民に両候補者がどのように大統領像を提示したかを、ミクロなレトリック分析、非言語言語分析、政治資料分析を中心に研究し、1976年討論における大統領像と比較して検討した。1976年第二回討論に関しては、テレビ討論で顕著に表れたメディア政治の特性と危険性を浮き上がらせ、1960年第三回討論会での類似の現象と比較して検討した。

【結論・考察】

本研究では、従来個別に行われていた人文社会学的ミクロな大統領ディベート分析を、マクロに政治理論化につなげようとした。具体的には市民参加型のテレビ討論という制度がアメリカ合

衆国の政治文化をどのように変容または促進させているのかを、そのレトリックの形成過程を明らかにすることで、分析した。

本研究では、テレビ・ディベートが、大統領をシンボル化し、国内政策を圧迫する外交政策を推進する機能を持つことが明らかになった。1960 年に関しては、米国大統領史という米国共同体意識に基づくレトリックの形成過程を、1976 年テレビ討論に関しては、公開討論会という場において、公開できない外交交渉に関する発言をするためのレトリックの形成過程を、大統領候補者選挙史料から明らかにした。

以上のように、テレビ・ディベートを通じて市民は両候補者を審判するが、同時にテレビ・ディベートは歴史的な大統領像の復権の場であり、テレビ・ディベートが「語ることが統治である」という一つの政治文化の表れなのである。